黒白の世界―漆黒―

リコラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒白の世界―漆黒―

【Ｎコード】
Ｎ９５２６Ｄ

【作者名】
リコラ

【あらすじ】
「お、お前は…何で…どうしてだ…何で此処に！？」ある日、コナンが再会してしまった最悪の人物によって、運命の歯車は狂い、そして、真実へと動き出す。少しずつ明かされていく彼の過去は、黒の組織との最期の全面対決の火蓋を切って落とした……！！！

序章・『彼』の現在（前書き）

ちなみに、原作６０巻まで＆映画のネタバレを含みます。

序章・『彼』の現在

「…彼の検査結果が届きました。」

夜中、誰もいなくなった検事局に、一人の男の声が響く。

報告を受けた女はおもむろに茶封筒に手を伸ばし、中の資料を取り出した。

そして、紙にはこう書かれていた。

＜検査結果・二重人格＞

「なっ……に、二重人格ですって！？」

よほど驚いているのか、女の声は裏返ってしまっている。

「これでは、刑事責任が軽くなるか、あるいは…」

―いや、それは駄目……そんなの…

彼女は自分にそう言い聞かせると、男に尋ねた。

「ねえ、次の裁判はいつ？」

「一週間後です。」

そう、と返して彼女はツカツカと玄関へと歩いていった。

何としてでも、彼の有罪を勝ち取ってやるわ。

—妃さん、あなた方の為にも。

…バタン。

そして彼女……九条検事は、検事局を後にした。

序章・『彼』の現在（後書き）

皆様、始めまして！リコラと申します。

まだまだ未熟者ですが、よろしくお願いいたします。

さて、まだ登場はしていませんが、今回の章で一応、『彼』に関するヒント（のつもり）を書いてます。　一体誰でしょうか！？（ちなみに絶対誰もが驚く（というか引く）人物です…（苦笑））

あと、更新のペースはなるべく週に2、3回くらいにしようと思ってます！

（アバウトですみません…）

評価、感想等もお待ちしてます！！

第一章・奇妙なメール

―それから、2週間が経ったある日。
コナン達一行はいつものようにカラオケでワイワイ騒いでいた。
それに今日は珍しく、哀も少年探偵団の面子に混ざっている。

「♪あなたがいるから♪私は強くなる」
「♪誓いの指輪キラキラ綺麗ね……」

と、蘭と園子がデュエットで歌いだした。
お決まりの曲だ。
それをマラカスで盛り上げる、元太、歩美、そして光彦。

「はァ……こいつらも好きだねぇ、カラオケ。」
ストローでコップの中のオレンジジュースを飲みながら、半ば呆れ顔で見つめるコナン。
「あら、歌ったらいいじゃない」
その横で、皮肉たっぷりにコナンに笑いかける哀。
その言葉に、少しムッとしながらも、コナンはチラリと蘭を見やった。

そーいやオレ、蘭と…した事が無かったな。
……デュエット。

「ちょっとコナン君、コナン君？」
「…え？」

コナンは不意に掛けられた声で我に返った。
蘭だ。

ホラ、とコナンに手を差し出す。
「一緒に歌おう、コナン君」
―その瞬間。
「えええええええ？！」
メンバー全員の絶叫が響き渡った……
「蘭！？だ、だってそのナマガキは…」
「えー！！コナン君が蘭さんと歌うの！？」
「マジかよ！？」
いつものコナンならその言葉に反応するものの、モロに蘭にこんなことを言われてしまっては、真っ赤っ赤になるしか術は無かった。
そして蘭はコナンにマイクを持たせると、歌い始める。
「♪Ｙｏｕ　ｗｉｌｌ　ｒｅａｌｉｚｅ　小さな夢も」
次、コナン君だよ、と蘭が微笑みかける。
「は…♪はぁァ　よぉぅぁ　ざ　わァん……♪いつかァ　叶えられるゥ…」
ビーーーー！！！

その途端に全員の鼓膜に異常が発生したのは言うまでも無い。
哀でさえも苦笑いで拍手をする始末。

「う、上手かったよ、コナン君…」

蘭がアハハハ……と頑張って笑顔を繕う。

知らぬが仏、とはよく言ったものである。

「ねえ、蘭姉ちゃん…どうして急にボクとデュエットなんかしたくなった？」

あぁ、と蘭は屈託の無い笑顔で言った。

「コナン君とデュエットした事、一度も無かったでしょ？何かその事、急に思い出しちゃって……」

――蘭…

オメーも、オレと同じ事…

「あらあら…随分アツアツじゃないの、お二人さん？」

不意に園子が割って入った。

「な、何言ってるのよ！？コナン君はまだ小学生よ、小学生！」

「愛に年齢差なんて関係ないのよ！」

「そんなわけないでしょ！」

……等と、蘭と園子の応酬が続く中、

ブーッ…ブっー…

コナンの携帯が振動し出した。

「おっ、メールだ。誰からだろ…」

ピッ

メールを見ると、送信主の名前は書かれていないのに、題名欄に『お久しぶり』と書いてある。

メルアドを変えた知り合いだろうか？

だが、その内容は――コナンの大好きな謎（モノ）。

そう、暗号だった。

『PKOSPNASPNS　PKSPUNS　PHES　PBESPISPKAKOSPUENSPDES

PASISPTAS　PASAS　P10SPZINIS

PMATSUS

――PTSPUMIBSPITOS　PYSPORIS

ヒント・追伸』

「あら、何かしらそれ？」
横からひょいと哀が顔を覗かせた。
コナンは少し考え込んだ後、哀にこう言った。
「こいつは、挑戦状だな」
「挑戦状…？」
あぁ、とコナンは得意気に頷いてみせた。
オレへの挑戦……いや、復讐…

――そして、それとほぼ同時刻。
都心近くのマンションの一部屋に『彼』はいた。
「よし、送信完了っと」
彼のあの好奇心旺盛な性格だ。
必ずあの暗号に食いついてくる。
もっとも、目的を誤解されてるかも、だけど。
―それに…
コナン君が私を許してくれる筈が無いしね…

ふぅ、と『彼』は自嘲気味に溜息をついた。
―でも、それでもいい。
コナン君には、会っておきたい。
パコッ
そして『彼』は携帯を閉じた。
「……満月、か」
窓際から、夜空に浮かぶそれを見つめながら、『彼』は呟いた。
ガラスに映る、『彼』の姿。
ワイシャツに緩めたネクタイという風貌は、かつての『彼』を彷彿とさせる。
「明日が楽しみだよ……コナン君」
端正な顔に少し二ヒルな笑みを湛える『彼』。
……そんなやり取りの中、夜は過ぎていくのだった…

第一章・奇妙なメール（後書き）

どうも、リコラです。
今回はあまり進展こそ無かったものの、ヒントでいっぱいです。
探してみてください！
さて、次回は遂にコナンと『彼』が接触します。
果たして、『彼』の正体とは！？
※暗号が一部間違っていたので訂正させて頂きました。
この場を借りてお詫び申し上げます……

第二章・最悪の巡り会い

「……遅ェなー、例のメールの差出人。」

朝十時、澄み切った空を見上げるコナンの姿が此処――米花公園にあった。

そう、コナンは昨日のカラオケで受け取ったメールの指示に従って来たのだ。

あのメールを解読するには……まず、ヒントに着目しなければならない。

『追伸』である。

これは、追伸→P．S　というように置き換えることができる。

つまりヒントの意味は、PからSまでの文字を続けて読め、ということだったのだ。

それを踏まえてメールを読み返すと……

『コナン君へ　米花公園で　明日朝十時　待つ　――罪(つみ)人(びと)より』

……となる。

だがしかし、コナンには一つ解せない事があった。
それは、このメールの差出人『罪人』の正体だった。
まず、何故コイツはオレのメルアドを知っていたのか？
第二に、オレと会って何がしたいのか？
復讐？
はたまた、逆恨み？
―考えてみても、謎は深まるばかりだ。
ブーッ…ブーッ…
とそこに、またもやメールが入った。
『コナン』用の携帯だ。
（おいでなすったか……）
ピッ
コナンがアドレスを確認すると、やはりそれは例のメールの差出人だった。
内容はといえば……
『ゴメン！！寝坊して今起きたばっかなんでもうちょい待ってて下さい！』

瞬間、コナンの思考回路のヒューズがぶっ飛んだ。

何だ？

何だこの軽すぎる文体は！？

ありえねーだろ、自分から呼びつけておいて何が『ゴメン！！』？！

「ハハ…益々もってコイツの面（ツラ）が見たくなってきたよ！！」

怒りで我を忘れて立ち尽くすコナンであった。

――一方、当の本人はというと……

「ヤバいよなー…コナン君絶対キレてるよなー…」

等と今更の様に後悔しながら米花公園へと走り続けていた。

そうでなくても、私がコナン君と会うことだけでも、どうかしてるのに…

様々な思いが頭の中でぐるぐると廻る。

まず、なんて言ったら良いんだろう？

今、私がこの場にいることを何て説明したら良いんだ？

説明した所で、信じてくれる訳が…

「あ……」

気が付けば、『彼』はもう米花公園の門に辿り着いていた。

眼鏡を掛けた黒髪の少年を見つめたまま――

※　※　※　※　※　※　※　※

――夢だ。

絶対に夢だ。

昨日のカラオケのメールの事も、今此処にコイツがいることも全て悪い夢。

頼む。

夢なら早く醒めてくれ……！！

今すぐにでも、回れ右をして逃げ出したい。

「お、お前は…何で…どうしてだ…どうして此処に！？」

さっきまでの怒りも忘れて、コナンは心底――怖かった。

何故なら目の前の『彼』は、死の裁きを受けて然るべき殺人鬼。

まして、表社会に存在することすら、有り得ない人物。

「お前は……か…」

忘れもしない、その名前は……

「か、か、か、か……」

か、か、か、か、か…

……何だっけ？

と、とりあえずここは…

「あの時の趣味悪すぎなヤブ医者ー！？」

「は！？そりゃ無いって！」

『彼』はオーバーに反応すると、はぁと一つ溜息をついた。

「ってか、絶対忘れてるよね？私の名前」

「……」

――私の名前は…

「私の名前は……」

そしてその瞬間――

コナンは、しんと音を忘れた。

目の前にいる『彼』の名前を告げられたその時刻(とき)から……

「私の名前は……風戸　京介」

第二章・最悪の巡り会い（後書き）

……はい、出ましたね。
まさかの風戸（笑）→［映画ネタバレってこういう意味です］

「何で！？」という声が聞こえてきそうなので、今の内に言い訳させて頂きます…

初めから『彼』は、キッドや黒ずくめの組織等を除いて、一番コナンを追い詰めた人にしようと思ってたんです。
で、まぁ……こうなってしまったんです（汗）
この時点でもうついていけない！！と思った方、迷わずＢａｃｋして下さい。
こんなのもまぁいいじゃないか、という方のみ、お読み下さい。
本当にすみません……そして、ありがとうございます。
以上、リコラでした。

第三章・コナンの怒り

「――何でオメーが此処にいるんだよ」

両者無言のまま立ち尽くして5分経過した、コナンの開口一番だった。

何でだよ……

何でこんな奴が……

※　※　※　※　※　※　※

――ある時、現職の刑事が殺されるという異常事態が発生した。
警察が厳戒態勢を敷く中、佐藤刑事までもが襲われてしまう。
そして偶然その場に居合わせた蘭は――ショックで記憶を失ってしまった。

絶対に許せない。

記憶喪失の蘭さえも、顔を見られたからといって執拗に狙う卑怯なやり方。

オレが蘭を守ってやる……

その思いを胸に抱いて、コナンは蘭を守り切った。

蘭の主治医であった、心療科医師―風戸の手から。

※　※　※　※　※　※　※

殺人を犯した風戸は、確かに裁かれたはずだ。

なのに…

あの事件からまだ数ヶ月も経っていないというのに……

「何でオメーが此処に居るんだよ…！？」

怒りを露(あらわ)にして、コナンは怒鳴った。

握り締めた拳がわなわなと震えていた事にも気づかずに。

風戸は、ただ俯いてコナンから目を逸らすことしか出来なかった。

やっぱり、コナン君には会わなければ良かったかもしれないと思いながら。

やっぱり、こんな真実はコナン君には残酷すぎるよな、と思いながら。

一言、彼は言った。

「……ごめん…ね」

――瞬間、コナンの中で堪えていた憎悪(モノ)が弾けた。
それは、彼が未だかつて誰にも抱いたことの無い感情。

「ざけんじゃねーよ！！」

コナンは無意識の内に拳を振り上げていた。

蘭を襲った……

佐藤刑事を襲った……

何の罪も無い人を幾人も殺した……目の前の、罪深き男。
それも…自分の自尊心(プライド)を守るためだけに起こした殺人を、隠すために……！！

そんな奴を許せと！？

コナンの思考が徐々に興奮の熱を帯びてくる。

そしてその拳は容赦なく風戸の腹部に食い込む……

パシッ

――筈だった。
少なくとも、体は無意識の内にそう動いていた。

風戸がその手首を異常な力で掴まなければ。

「……」

ただ無言で、コナンの華奢な手首をゴキゴキと音を立てて締め上げていく。

「くあァ……！」
苦痛の声が洩れる。

……たい…

イ……

タ……

イ……

抵抗しようとするが、体が金縛りにあってしまったかのように動かない。

その刹那、コナンは必死に痛みを堪えながら風戸の顔を見た。

笑っていた。
整った顔に浮かぶ、歪んだ笑い。

てめぇ……やっぱり、オレに……ふくしゅ…

コナンの言葉は、そこで途切れた。

風戸が急にコナンの手を解放したからである。

「ごっ…ごめん！ごめん！！いや、ちょっ本当ごめん！」

なんと、急に謝り出したのである。

呆気に取られるコナンを尻目に、ただただ謝りまくる風戸であった。

「な、何だよ急に！オレをシメたり、オレに謝ったり…」
ようやく落ち着きを取り戻したコナンは風戸に聞いた。

「あ、いや、実はさ」
風戸が申し訳なさそうに切り出す。
「私は…どうやら二重人格らしい。」

「……は？」

これが――嵐の予兆であった。

第三章・コナンの怒り（後書き）

どうも、リコラです。
いやぁ遂にやってしまった！＜＾．＾；＞
このコナン君の憎しみの気持ち！
コナン君のこの初めての感情書いてて、
「でもコナン君、お人好しだからなぁ」
とか、なんやかんやと思ってまして（笑）
後々、苦悩するコナン君も書いてみようと思います！

さてさて、風戸の二重人格発覚！
どうなってしまうのでしょうか……ねえ…（遠い目）
評価・感想もお待ちしてます！

Memorys of kazato 1（前書き）

今回は、風戸の一人称デス！

Memorys of kazato 1

……何故だろう

違和感は消えない

いつもと何も変わっていないはずなのに

何だろう？

このもやもやした感覚は

その正体を私が知ることになったのは、翌日のテレビのニュースだった

なんでも、現職の警察官が殺害されたのだとか

物騒な世の中になったものだと、何の気なしにテレビをみる私

でも、次の瞬間、私はテレビに釘付けになった

その顔写真は……私がかつて殺した、仁野（じんの）　保（たもつ）の事件を秘密裏に捜査していた刑事だったのだ

その時は、おかしなこともあるものだと、首をかしげただけだった

真実が、恐かったから

だって、その刑事の死亡推定時刻は、私がちょうど休憩していた時間だったから

そして…ようやく思い出した

その時、私は何をしていたかという記憶が、すっぽりと抜け落ちていたのだ

それから、また刑事が殺された

新聞では、テロだのなんだのと騒いでいたが、私だけは知っていた

テロなんかじゃない、と

だってそれは、私が犯した罪だから

もう間違いなかった

こんなに私の都合のいいように人が殺されているなんて

私だ……

私が……殺ったんだ

無意識のうちに

捕まるのが嫌で

私はこの手で人を殺した――……

「……っあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛!!!」

以前も私は人を殺したが

でも、それは確かに『私』が犯した罪

ドクン…!!

心臓が早鐘を打つ

私の中に、誰かがいる……!?

そんな恐怖が私を包み込んだ

そして、私は思った

あの事件の捜査をしていたのは、三人

ならば私は、あと一人、人を殺す

その前に、私が死ねばいい……と

そんな時に、白鳥警部のパーティーに誘われた

何も知らない彼は、私に名探偵の毛利小五郎氏を紹介した

まさか彼らも、その時は私が一連の現職刑事殺害事件の犯人だとは
思ってもみなかっただろう
私はといえば背中に冷たいものが走るのを感じながら、君を見ていた
曇りの無い、ただ一つの真実を見据えるような、真っ直ぐな眼の君を
アイツにそっくりな君の眼を
それが、私の過去を呼び起こす
それが、私の未来を狂わせる

Memorys of kazato 1（後書き）

更新、遅れてスミマセン！（汗）
本当にお待たせいたしました…
さてさて、何かワケ分かんない展開が続いてますが、次は公園の場面を終了させる予定です。
あと、今更ながらなのですが、評価して下さった皆様、ありがとうございます！
ご期待に副えるか不安ですが、これからも精一杯頑張らせて頂きます！

第四章・心に引っ掛かったこと

相変わらずの晴れ模様。
さっきまでと何ら変わりの無いはずの景色。
なのに……

「…二重人格って言うのには、どうも色々なパターンがあるらしいんだ。職業柄、そういう事には一番敏感なはずなんだけど…」

先に切り出したのは、風戸だった。

「やっぱり、こういうのを『医者の不養生』っていうのかねー…」

「んなこと誰も聞いてねーよ」

静かだが威圧感の漂うその口調に、風戸は口を閉じる。

「オレが聞いてんのは、何でオメーが此処に居るかって事だ」

「……だから…」

躊躇いがちに言葉を焦らす。

「裁判で、その精神鑑定の結果が焦点になって争われたんだよ。もしかしたら、一年前の事件から私は情緒不安定になっていたんじゃないか、って。…それで私は、仮釈放に…」

「ざけんなよ!!」

コナンの眼に、再び深い憎しみの色が宿る。

「畜生……オメーが…オメーが悪いに決まってんだろ！！？」

ワケが分からない。

確かに、コイツは二重人格かもしれない。

さっきの行動――未だこの急展開に戸惑ってはいるし、とても『はいそうですか』という返答を返せるようなことではないが、しかし――信じざるを得ない。

現にその精神鑑定によって、コイツは今、のうのうとオレの前に姿を現しているのだ。

だけど…だからって…

「だから何だよ！？だからって、オメーに非は無ぇって言うのかよ！！」

終いには絶叫するコナン。

何だよ……

一体、今更コイツは何を…

「落ち着いてくれ、コナン君。私は君に喧嘩を売りにきたワケじゃない」

「じゃあ何だって言うんだよ！？それ以前に、信じろって言うのか

?！お前を！！」

「……っそんなことは誰も言ってない！！」

突然、冷静だった風戸がその語調を崩した。

思わずコナンが口をつぐむ。

「君はいい。そうやって、君は『選ぶ』ことが出来るんだ。信じるか、信じないか」

そう言って、コナンを見つめる。

「選択肢の残されていない者は、どうすればいい？」

その時、初めてコナンは風戸を直視した。

ガラス玉のように碧く透き通った、一点の迷いも曇りも無い目。

それが……――コナンには少しだけ、グラついたように感じた。

「…一時間後、もう一度メールを送る。」

「誰が見るかよ」

「読むか読まないかは、君の自由だ」

そう言って、おもむろに風戸はコナンに背を向けた。

ちっぽけで、情けないくらい貧弱な後ろ姿だった。

※　※　※　※　※　※　※　※

『選択肢の残されていない者は、どうすればいい？』
気にするな。
そんなの向こうの落ち度だ。
オレに非があるワケじゃ無い。
分かってはいても、何となく心に引っ掛かる。
何故？
あんな奴の戯言なんて、どうでもいいことなのに……
そんなことを考えながら、コナンは帰路についていた。
服はびしょびしょだ。
コナンは、雨が降っていることにさえ、気付いていなかったのだから。
いくら考えても、胸のもやは晴れない。
何だ？
何だって言うんだ？
そうこうしているうちに、コナンは毛利探偵事務所に着いた。
きっと、蘭が朝から出掛けたコナンを待っているに違いない。
そう思うと……少しだけコナンは、息苦しい感じがする。
そして、自然と足は、米花町二丁目二三番地に向かっていった。

第四章・心に引っ掛かったこと（後書き）

いやぁ、何かどんどん重苦しい、変な方向に行っちゃってますねー
（オイ）
まあ、次くらいから明るい感じにはしたいなぁ、と…
（あくまでも希望…）
なんかペースが乱れがちですが、辛抱強く見守ってあげて下さい…
（汗）

あと、もしよろしければ、評価・更新もお待ちしてます…

第五章・降り止まぬ雨

「……止まないわね、雨」

暗雲の垂れ込める空。
鳴り止まぬ雨音。
そんな中で唯一聞こえる雷の音。

博士のいない研究所で、一人佇(たたず)む少女。
彼女―灰原哀は、ふぅと溜息をついてその様子を興ざめた顔で見やる。
（こんな雨の日だったわね。私があそこから抜け出したのは）

覚えているのは、私を冷たく突き放す雨の匂い。
そして、古びた洋館に掲げられた表札名、『クドウ』だけ。

彼だけが、私にとっての唯一の希望であり、光だった。
それは今でも同じで、私にはあまりにも暖かく、目映(まばゆ)いモノ……

ピンポーン
と、呼び鈴が鳴った。

こんな天気なのに来客とは。
「はぁい・・・・!?っえ・・・・」
欠伸交じりにドアを開けた瞬間、哀の瞳に驚くべきものが映った。
「くどう・・・・くん・・・・?」

※　※　※　※　※　※　※
「取り敢えずその服を脱いで、タオルで体を拭きなさい。風邪をひくわ」
哀はそういってコナンにタオルと、自分の服とを手渡した。
コナンが無言でそれを受け取る。
「・・・・どうしたの?こんな雨の中、傘も差さないで」
哀の問いにもやはりコナンは答えず、黙々と着替えるだけだった。
こんなに元気のない彼を見るのは初めてだ。
「ねえ、ちょっと聞いてるの?工藤く・・・・」
コナンがおもむろに顔をあげた。
普段の彼なら有り得ない、蒼ざめた表情。
「灰原」
震える声でコナンは言った。
「俺・・・・最低だ」

第五章・降り止まぬ雨（後書き）

えー・・・前置きはナシです。
ほんっっっっっっとすみませんでした！！！
気付けば3ヶ月経過。
ああーもぅマジでごめんなさい。
今後はこんなことはないようにしますので、許して下さい・・・

第六章・新たな動き

どうして、俺はあんなことを・・・・・

憎しみは何も生み出さないと、誰よりも一番良く知っているはずなのに。

なのに俺は、どうして人を憎んでしまった？

「・・・俺は・・どうして・・」

そうだよ。これじゃ、俺はまるで風戸（アイツ）と同類じゃねーか・・・・

探偵失格だよ・・・・・・

※　※　※　※　※　※　※　※

コナンは灰原に、今までのことを洗いざらい全部話した。

風戸との再会。多重人格の事実、無罪放免の判決となった裁判。

そして・・・・

自分自身に突きつけられる、『探偵失格』のコトバ。

「ふっ・・・・工藤君？私を笑い涙で溺れ死にさせる気？」

意外にも、あっさり流されてしまったことにコナンは少しポカンとした。

「な、何でそこで笑うんだよっ！！人が本気で悩んでるってーのに・・・・」

「そういうのを、お人好しっていうのよ」

灰原がぴしゃりと言い放つ。
「優しすぎるが故に、罪を感じる。・・・・贅沢な悩みで羨ましいわ」
そう笑顔で告げられると、何とはなしに少しだけ安堵した。
何故なのかは分からないが、それはそれでいいのかもしれない。

「雨に打たれて悩んだ割に、ほぼ一瞬で解決しちまったな」
哀はすっかり元気になった気まぐれな名探偵を、ちょっぴり微笑ましく見つめた。
工藤君は、やっぱりこうでなくっちゃね。

と、その時、またもや来客を知らせるチャイムが鳴った。

ピンポーン・・・・

「博士が帰ってきたのかしら？」
哀が様子を見に玄関の戸を開けると、そこに立っていたのは・・・・

「Ｈａｙ！クールキッド！！」

第七章・重要人物は・・

「ジョディ先生!?」
コナンが驚きの声を上げる。
「お久し振りね、コナン君。・・・・彼はもう来てるかしら?」
「彼?」
きょとんとなる哀とコナン。
か・・・・彼・・?
心当たりがない。一体、誰のことだ?
「おかしいわね・・・・彼、先にここに行くからって言ってたのに」
「ジョディ先生、あの・・・・彼って、ダレ?」
恐る恐るコナンが聞くと、ジョディは不思議そうな顔で平然と告げた。
「風戸京介。警察官連続殺害事件の容疑者・・・・・・って言ったほうが分かりやすいかしら?」
―瞬間、コナンの中で何かが・・・・弾け飛んだ。
か・・・・風戸が・・・・

まさか・・・あいつらに・・っ！？

黒の組織に関係しているって言うのかよ！！？あいつらに、だと！！

「あら？でも彼、あなたと面識があるって・・・どういうこと・・」

「・・・あいつは組織とどう関係してるの！？」

急なコナンの態度の変化に、ジョディも流石におかしいことに気付く。

頭に血の上ったコナンに、哀がすかさずフォローを入れた。

「ちょっと・・・そんなにイライラしないで。朝から牛乳飲んでないんだから。カルシウム不足だからって私たちに八つ当たりしない」

・・・・・・フォローになっているかどうかは置いといて。

「彼はね、組織の一員だったのよ」

・・・少々ＫＹ気味なこのジョディの衝撃の発言。

この事実が、コナンたちにどう関与するか・・・・

それは、まだ誰も知る由のない事実・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9526d/

黒白の世界―漆黒―

2010年12月12日14時20分発行